

経営協議会学外委員からの主な意見への対応状況
(2025年1月～2025年10月)

経営協議会	学外委員からの主な意見等	対応状況																																																																																		
第94回 (令和7年1月30日)	<p>大学の「将来像」について</p> <p>自身の親族が高校生で、国際バカロレア（IB：International Baccalaureate）のコースに通っており、一般の高校の教育とは異なり、生徒が主体的に一生懸命に学習した上でないと、自律性が高い授業についていけないと聞いている。一方、日本の教育は、従来、講義を受けノートに写すといった受動的な教育がなされてきた。大学生の学習時間が減少している中で、バカロレアコースを受ける高校生は、日本の伝統的な教育とは異なる自発性を重視した教育を受けている。一方で、バカロレアのコースの高校生が日本の大学に進学するには、高い成績基準が求められている。また、昨今の円安の影響で、従来、これらの高校生の関心が強かった海外の大学への進学も、以前より難しい状況になっている。文部科学省がバカロレア校を増やしていることから、今後の学生供給が安定する可能性がある中で、円安が続く限り、バカロレアのコースを受ける高校生の国内の大学への進学志向も高まっている。このような特色ある教育を受けた学生の受け入れについて、本学も戦略的に考える必要であるのではないか。</p>	<p>本学では特別選抜制度（学校推薦型選抜、帰国生等特別推薦選抜、外国人私費留学生選抜）を通して、一般入試を経て本学に入学する学生とは異なる多様な能力を持った学生を受け入れている。国際バカロレア・コース及びそれに準じるような中等教育を受けた学生については、特に帰国生等特別推薦選抜、言語文化学部・国際社会学部私費外国人留学生選抜によって受入をはかっているところである。入学後の追跡調査によるとこれらの選抜を経て入学した学生は優秀な成績をおさめていることが多く、今後、特別選抜制度の拡大を検討する。</p> <p>高校では「探究型学習」が標準となり、生徒の主体的な学習（課題設定、課題の解決）が進められているが、本学は高大連携校に対して、本学教員・学生・院生が高校生の探究型学習への協力を進めている。これは高校・大学での学びを接続する試みであると同時に、主体性を持つ高校生を本学に導く目的も持っている。</p> <p>なお、近年における入学実績は、次の別紙1のとおりである。</p> <p style="text-align: center;">帰国生等特別選抜実施状況 別紙1</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>入学年度</th> <th>学部</th> <th>募集人員</th> <th>志願者数</th> <th>受験者数</th> <th>合格者数</th> <th>入学者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4">2024 (R6)</td> <td>言語文化学部</td> <td>若干名</td> <td>11 (4)</td> <td>10 (3)</td> <td>1 (0)</td> <td>1 (0)</td> </tr> <tr> <td>国際社会学部</td> <td>若干名</td> <td>15 (9)</td> <td>8 (7)</td> <td>4 (2)</td> <td>4 (2)</td> </tr> <tr> <td>国際日本学部</td> <td>若干名</td> <td>11 (4)</td> <td>9 (2)</td> <td>5 (1)</td> <td>5 (1)</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td></td> <td>37 (17)</td> <td>27 (12)</td> <td>10 (3)</td> <td>10 (3)</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">2023 (R5)</td> <td>言語文化学部</td> <td>若干名</td> <td>12 (6)</td> <td>8 (3)</td> <td>5 (1)</td> <td>5 (1)</td> </tr> <tr> <td>国際社会学部</td> <td>若干名</td> <td>12 (7)</td> <td>7 (5)</td> <td>3 (3)</td> <td>3 (3)</td> </tr> <tr> <td>国際日本学部</td> <td>若干名</td> <td>10 (0)</td> <td>8 (0)</td> <td>5 (0)</td> <td>5 (0)</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td></td> <td>34 (13)</td> <td>23 (8)</td> <td>13 (4)</td> <td>13 (4)</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">2022 (R4)</td> <td>言語文化学部</td> <td>若干名</td> <td>11 (4)</td> <td>11 (4)</td> <td>3 (2)</td> <td>3 (2)</td> </tr> <tr> <td>国際社会学部</td> <td>若干名</td> <td>18 (3)</td> <td>7 (0)</td> <td>4 (0)</td> <td>4 (0)</td> </tr> <tr> <td>国際日本学部</td> <td>若干名</td> <td>7 (1)</td> <td>4 (1)</td> <td>3 (1)</td> <td>0 (1)</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td></td> <td>36 (8)</td> <td>22 (5)</td> <td>10 (3)</td> <td>7 (3)</td> </tr> </tbody> </table> <p>※各数値のカッコ内はIBの資格の者の数</p>	入学年度	学部	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	2024 (R6)	言語文化学部	若干名	11 (4)	10 (3)	1 (0)	1 (0)	国際社会学部	若干名	15 (9)	8 (7)	4 (2)	4 (2)	国際日本学部	若干名	11 (4)	9 (2)	5 (1)	5 (1)	合計		37 (17)	27 (12)	10 (3)	10 (3)	2023 (R5)	言語文化学部	若干名	12 (6)	8 (3)	5 (1)	5 (1)	国際社会学部	若干名	12 (7)	7 (5)	3 (3)	3 (3)	国際日本学部	若干名	10 (0)	8 (0)	5 (0)	5 (0)	合計		34 (13)	23 (8)	13 (4)	13 (4)	2022 (R4)	言語文化学部	若干名	11 (4)	11 (4)	3 (2)	3 (2)	国際社会学部	若干名	18 (3)	7 (0)	4 (0)	4 (0)	国際日本学部	若干名	7 (1)	4 (1)	3 (1)	0 (1)	合計		36 (8)	22 (5)	10 (3)	7 (3)
入学年度	学部	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数																																																																														
2024 (R6)	言語文化学部	若干名	11 (4)	10 (3)	1 (0)	1 (0)																																																																														
	国際社会学部	若干名	15 (9)	8 (7)	4 (2)	4 (2)																																																																														
	国際日本学部	若干名	11 (4)	9 (2)	5 (1)	5 (1)																																																																														
	合計		37 (17)	27 (12)	10 (3)	10 (3)																																																																														
2023 (R5)	言語文化学部	若干名	12 (6)	8 (3)	5 (1)	5 (1)																																																																														
	国際社会学部	若干名	12 (7)	7 (5)	3 (3)	3 (3)																																																																														
	国際日本学部	若干名	10 (0)	8 (0)	5 (0)	5 (0)																																																																														
	合計		34 (13)	23 (8)	13 (4)	13 (4)																																																																														
2022 (R4)	言語文化学部	若干名	11 (4)	11 (4)	3 (2)	3 (2)																																																																														
	国際社会学部	若干名	18 (3)	7 (0)	4 (0)	4 (0)																																																																														
	国際日本学部	若干名	7 (1)	4 (1)	3 (1)	0 (1)																																																																														
	合計		36 (8)	22 (5)	10 (3)	7 (3)																																																																														
	<p>外国とのネットワークも重要であり、日本国内のものはもちろんのこと、外国の博士号等の学位を持つことが国際的な職業において強みとなるため、ダブル・ディグリー・プログラムなど、外国の学位を取得できる制度が大きな魅力となるのではないか。</p>	<p>現在、国際日本学部において、セントラル・ランカシャー大学（イギリス）と、メルボルン大学（オーストラリア）との間にそれぞれダブル・ディグリープログラム（DDP）を実施している。大学院総合国際学研究科博士前期課程（国際日本専攻）では、2025年4月に梨花女子大学から1名を受け入れる。また、大学院総合国際学研究科博士前期課程では、文部科学省の「人文社会科学系ネットワーク型大学院構築事業」に採択され、従来、中央ヨーロッパ大学（ウィーン）をはじめヨーロッパ4大学の間に進めてきたDDP「公共圏における歴史」をいっそう拡充することとなった。このプログラムでは今後、毎年10名程度のDD（ダブル・ディグリー）取得者を見込んでいる。</p> <p>今後のDDPに関する予定としては、学部（派遣：国際日本学部、受入れ：言語文化学部、国際社会学部）において、リオ州立大学（ブラジル）とは2025年3月に調印しており、ホーチミン市人文社会科学大学（ベトナム）については、学内審議・承認を経て、予備協定書を先方に提出して手続きを進めている。</p> <p>その他、インドネシア大学とは2024年8月に交渉を開始しているが、DDPの実施にあたって先方で新たにInternational course（英語プログラム）を設置しなければならないため、実現までに3～5年程度の年月を要する想定している。</p>																																																																																		

経営協議会	学外委員からの主な意見等	対応状況
第97回 (令和7年6月30日)	2026年度概算要求について グローバル・イノベーション・デザイン機構については、非常に時宜を得ているというか、日本の高等教育機関の長期的、構造的な問題に1つの解決策を導き出すようなプロジェクトだと思います。日本にとって修士・博士課程とその先にある実務面とのつながりの部分、アカデミアのみならず実務に直結する人材を修士・博士課程で育成するというのは、欧米の教育機関と比較すると、弱い部分だったと思います。質問ですが、学部と修士一貫の教育というのは、具体的にはどういうことを想定されているのか。具体的に、学部と修士をつなげた一貫教育をどう想定されているのかを伺いたい。	本学は、新たに春名学長が就任したことを機に、学部・大学院改組を含む中長期的な改革構想として「TUFS GREEN Initiative」を策定した。その中核を担う組織として、産学連携によるPBL等を積極的に取り入れた教育プログラムの開発を担う「グローバル・イノベーション・デザイン機構」の設置のための概算要求を行い、予算措置がされる見込みとなった。これを受けて、クロスポイント制による実務家教員の採用を行い、2026年度から実践的なカリキュラムの開発に向けて検討を進める予定である。また、将来構想専門部会の下に設置された大学院博士前期課程改組ワーキング・グループで、学部・修士5年一貫教育を含めて、改組後の具体的内容について検討を開始したところである。
第97回 (令和7年6月30日)	大学院改革について 修士のところまでは企業側もある程度意識していると思うが、博士人材になると、どういう汎用的な素養を持っているかは、企業からは見えない。そのため、大学がどういう教育や研究の指導をしていて、どういう汎用的な能力を身につけているかということ、本学だけではなく、大学が努力をして、これから文系も修士、博士がこういう能力を持って出ていくので、もっと採用をふやしてほしいということを組織的に働きかけていくべきではないか。企業側は、理系の人材についてはかなり問題意識を持っていると思うが、文系の人材についてはまだまだ準備ができていないということを理解して、大学が組織的に企業に働きかけをして、どういう能力を持っている人材なのか、そういう人たちがこれからたくさん出てくるんだということを社会が理解するようにしないと、大学院改革は、やってもやっても、受け入れる側は、まだまだという感じで終わってしまうのではないかと。	2028年度の博士前期課程の改組を見据えて、企業や国際的な機関で活躍している方々を講師として迎え「TUFS職員のための産学連携セミナー」を5回実施し、求める人材像、特に本学の学生に期待するスキル等について意見交換を行った。講師からは「相手側の中に深く入り込んでゆく力」や「AIに代替できない、文脈を読み取る力」などの意見があり、「院卒の学生は対話力、思考の深さと落ち着きがあり優秀である」などの印象を語る講師もいた。本学としては、これらの意見を参考に、産学連携による教育研究プログラムを開発し、実社会で実践的な課題発見・解決に取り組むことのできる人材を育成するべく、改組後の新たな教育内容を検討していく予定である。 【第1回】 2025年11月5日(水) 開催 講師：江利川宗光(本学理事) テーマ：激動(VUCA)の時代を超えて求められ続ける人材要件は？ 【第2回】 2025年12月3日(水) 開催 講師：下條貴弘(学校法人至善館常務理事) テーマ：至善館について 【第3回】 2026年1月23日(金) 開催 講師：根本かおる(国連広報センター所長) テーマ：国連で働くということ&国連で求められる資質 【第4回】 2026年2月3日(火) 開催 講師：清水新一郎(JAL副会長) テーマ：TUFS教職員のための産学連携セミナー -言語のプロから社会の変革者へ- 【第5回】 2026年2月4日(水) 開催 講師：井上波(TBSホールディングス執行役員) テーマ：“言語の壁”を超えた先へこれからの「外大生」に求められるスキルと経験